

DALS ニュースレター No.13

東京大学
21世紀COEプログラム

生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築

Construction of Death and Life Studies concerning Culture and Value of Life

2006年4月10日

目次

巻頭エッセイ：哲学者の顔

一ノ瀬 正樹

エッセイ：親の死に目に会えない？

野島（加藤） 陽子

書評：福島章著『殺人という病』

松本 聡子

●研究会・シンポジウム報告●

国際シンポジウム「死とその向こう側」報告

多田 一臣

「次世代死生学研究会議——深化と展開」報告

仁平 典宏

●今後の予定●

「共生のための国際哲学交流センター」(UTCP) との協力

末木 文美士

今後の行事予定

『死生学研究』2006年春号目次

Philosophy of Uncertainty and Medical Decisions (Bulletin of DALS Vol.2)

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku>

哲学者の顔

—ノ瀬 正樹（本研科助教授・哲学）

哲学者には哲学者にふさわしい顔がある。深い思索、鋭い洞察力、世界を俯瞰する超越的な視線、自我に縛られない普遍的な態度、自分個人の生死に対する完璧なる無為自然、言葉の虚妄性を徹底的に知り尽くした振る舞い、毅然として大地に立つ姿勢、そして邪念なく純粹に遠くを見据える無垢な眼差し。おそらく、これらを放ち知らしめる顔こそ、哲学者の顔というべきであろう。けれども、直ちに明らかなように、こうした要素を具現する人はまずいない。哲学者といわれている人たちのなかでも、わずかにソクラテスのみが、生涯書物を一冊も著さなかったという一点において、他の人（もちろん私も含めて）に比べればこうした条件にかなり近いとはいえるかもしれない。書物を発表するなどという行為は、少し冷静に考えれば分かるように、俗物的行為以外の何ものでもないからである。ゆえに、ソクラテスは今日においても哲学の世界では批判されることがまずない、きわめて別格かつ絶対のヒーローとして君臨し続けており、まさしく「哲学者の顔」なのである。しかし、いかにソクラテスとて、真に哲学者の顔を具現しているとはいえない。彼もまた、言葉を使って人と対話し、アポリアへと誘導していくなどという振る舞いをしてしまっているからである。そんな人は、厳密には、哲学者の顔を持ちえないはずなのだ。

では、哲学者の顔などというのは、単なる理想であって、実在的なものではないのだろうか。そうではない。私は実は毎日哲学者の顔に遭遇している。犬、である。私の愛犬たち（「しずか」と「牛若」）である。彼らは私をまっすぐに見つめる。一点のくもりもない目線で私の心を見据え、私を射抜く。そして、空を、遠くを見通し、大地にすくっと立ち、尻尾をくるんと丸め、自己の運命にさらっと潔く安らい、言葉では金輪際理解不能なこの世界の真実を全身に受けとめ、それを放ち返し、その表情によって私を圧倒する。哲学者の顔とは、これのことではないのか!! 決して自分の愛犬を溺愛する親ばかの言説ではない。どんな犬もそうなのだ。犬たちは一瞬一瞬をそのまま生きる。名誉心も、虚栄心も、そして死への恐怖心もない。悪性の腫瘍でふくれあがったお尻をちょこちょこ揺らせながら、散歩の瞬間を無限に享受している犬もいる。買いかぶりすぎだ、という声もあろう。確かに。犬たちはうるさく吠え、すぐに興奮し、堀に小便を引っかけ、お行儀悪くえさを食い散らかす。そして、昼間でもものうのうと惰眠をむさぼる。なんという脳天気な者どもだ!! なんというお調子者か!! けれども、そんなことはまったくもって完全に完膚無きまでに取るに足らない。犬たちはこの世界に生きるという、善でも悪でもないそのままの実在性を単に存在している。そのことによって人間に哲学者の顔を知らしめている。生きることを和んでいる。死にゆくことを生きている。ならば、1%でも哲学者たらんと志す者は、犬から学ぶしかない。

こんな言い方をせせら笑っている人は、哲学については完全なもぐりである。ソクラテスの道をさらに突き詰めようとしたシノペのディオゲネスは、樽に住み「犬のような生活」(キュニコス・ピオス)を送って哲学者たらんとした(犬儒派と呼ばれる)。犬に範を求めるといというのは、古来からある哲学の一つの伝統なのである。もっとも、同様なことは犬だけでなく、馬、イルカ、猫、豚、牛、象など、ほかの動物からも学べるのではないかといわれよう。その通りである。ただ、犬は特別に人間に近い。『哲学者になった犬』(木村博江訳、文藝春秋、1998年)を著したスタンレー・コレンによれば、アメリカ・インディアンには、神が生き物を作った後で、人間界と動物界を分ける境界線を引き、そこから地面が割れてゆくとき、犬だけが溝を跳び越えて人間の方に来た、という伝承があるという(p.132)。犬に選ばれたこと、それが私たち人間にとってほぼ唯一の恵みである。私たちは、いつでもそこかしこで、犬たちの「哲学者の顔」の放ち広げる無限性を浴びることができるのだから。

親の死に目に会えない？

野島（加藤） 陽子（本研究科助教授・日本史学）

学部では、日露戦後から太平洋戦争までの外交と軍事といったテーマの講義をおこなっている。ひまがあれば外交官や軍人の日記・自伝・伝記類を読んでいる。講義の準備をしながら、深夜そうした史料を読んでいると、ときに時間を忘れてうっとりとしている自分に気づく。恥ずかしいことに、うっとりするのは、歴史の深遠を垣間見させてくれる記述にぶつかった瞬間でもなければ、外交官や軍人が目にした外国の風景や人物の見事な描写にぶつかった瞬間でもない。

私の心が陶然となるのは、大切な任務を帯び外国に派遣された外交官や軍人たちが、遠い世界の果てにあって親の死に目に会えないさまを描写するくだりに接した時である。なにせ六〇年から百年前の話、危篤の電報を受けたとておいそれとは帰ってこられない。近代短歌史上、挽歌の傑作を詠んだ齋藤茂吉は、一九一三(大正二)年五月一六日、「ハハキトク」の報を受け、上野駅を午後九時に発して、奥羽線経由で翌朝午前八時、山形県上ノ山の故郷の駅に辿り着いた。その間、一一時間(佐藤喜一『鉄道の文学紀行』中公新書、二〇〇六年)。この絶妙な距離は、『赤光』の「みちのくの母のいのちを一目見ん一目見んとぞいそぐなりけれ」を可能にした。もっと遠い異国では、甘い歌を詠むことさえかなわない。

だが、親の死に目に会えないという話ならば、そうした記述に接した時の正しい反応は、哀切さに胸が衝かれる、というものであって、うっとりしたり陶然となったりするのはそもそもおかしいのではないか——。おっしゃるとおり。そこに気づかれた方は、正しい情操を身につけて成長された方に相違ない。

私が陶然となるのは、まさに、逃れられない任務と辿り着けない距離という、二つの絶対的な条件にしっかりと支えられた「不可抗力」という自然の力が、自分の存在と親の死を隔ててくれる、その酷薄さゆえである。そうした酷薄さには安心と諦念がある。

いまどき、お国の為を身を尽くしている子に自らの病や死を断じて知らせしてくれるな、という覚悟をもつ親や、葬儀や納骨など一切の雑事を済ませた後、初めて外国にいる子に知らせをやる親族など、想像することすら困難だ。しかし、戦前には確かにそうした人たちはいた。事実、広田弘毅の母はそのように亡くなっていった。また、岡本かの子を亡くした夫・一平が、すべてが終わった後に初めて、パリにいる子息・太郎に宛て、順次、あなたの母は病に倒れた、残念ながら母の病は重いようだ、とうとう母は亡くなった、という手紙を一つ一つ順番に作為して、異国の地にいた太郎を気づかったことは、知る人ぞ知るエピソードである。

こうした親をもった人はつくづく幸いだと思う。昨年一〇月、ひと月間モスクワに滞在することになったとき、少しドキドキした。東京とモスクワはなにせ七五〇〇キロも離れている。しかし現実には厳しく、技術は進み、親は元気だ。ある種の携帯の機能は、外国にいても日本にいるときの通常の番号のままでつながるので、すぐにお呼びがかかってしまう。異国で親の死に目に会えないというパターンは、もはや限りなく遠く美しい夢と消えたのか。

老いることは病や死に一歩一歩近づくことなのに、歳をとればとるほど、病や死が自然現象の一つだということを忘れがちになる。医師で作家でもある南木佳士もどこかで書いていた。老いるというのはそれまで若さの力技で隠しおおせてきた、本来グロテスクな生存本能が露になってくる事態をいうのだそうだ。しかし誰か、本能に抗して、隠しおおせてくれないものか。このままでは私がうっとりする対象が絶滅してしまうのではないか。

〈書評〉 福島章著『殺人という病——人格障害・脳・鑑定——』（2003、金剛出版）

松本 聡子（本 COE 特任研究員・精神保健学）

わが国には、言葉に靈的な力が宿るという思想がある。いわゆる言霊というものである。例えば、名前には呪力があり、相手の名前を知るとは相手を靈的に支配できることと信じられていたため、平安時代の高貴な人々は名前ではなく役職名（頭中将 等）で呼ばれたという事実はよく知られている。また、昔話「大工と鬼六」では鬼の名前を言い当てた大工は鬼を支配した、という結末が描かれている。そして、このように「名前を知る」ことで相手を「支配する」という試みは、古来の日本に限ったことではない。

近代精神医学の世界では、精神障害の診断は、DSM (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders)、もしくは、ICD (International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems) というガイドラインに沿って行われる。これらのガイドラインにおいては表面にあらわれた症状だけを見て診断するという原則に基づいているため、診断名は診断する人の主観によって左右されることなく誰が診断しても同じ診断名に至る。すなわち、特定の条件を満たす群ごとに分類し、疾患としての名前をつけて一疾病単位としてまとめることで疾患を概念化／対象化し、「研究の対象」としての扱いを可能にする。そしてその結果、より適切な治療方法を模索するための研究を積み重ねることができる、という利点がある。これは、先ほどの言霊の例とは必ずしもその形や仕組みは同一とはいえないものの、対象に「名前」を与えることで結果的にその「名前」を人間が知り、「名前」を使いこなすことでコントロールを可能にすることを旨とするという意味で、共通する面があるとは言えないだろうか。

そうした背景の下、本書では、30年以上にわたって精神鑑定を続け、多くのケースを手がけた精神鑑定医・福島章が、著者自身の鑑定経験をもとに、「殺人」という現象について考察し、殺人者精神病 (murderer's insanity) という概念を確立するという試みを紹介している。本書の中で著者は、重大な殺人事件における精神鑑定では複数の精神鑑定医の診断の一致度が低く、また、犯行以前に犯罪者が受診していた医師たちの診断ともしばしば食い違っているという事実を指摘した上で、その理由は単純に医師の誤診に由来するのではなく、一般の病院臨床で診る精神障害の診断経験を基に構築された診断体系を犯罪者・殺人者にそのまま当てはめようとするに由来する診断の「ぶれ」なのではないか、という仮説を検証している。

例えば、DSM や ICD においては、あらゆる精神障害をガイドラインに載っている診断名のいずれかに分類するため、分類にあてはまりきれない病像であっても無理矢理どれかの診断名をあてがって分類しなくてはならない、という弊害もある。そのため、あらかじめ「特定不能」という類の疾患名も設定しているが、そのように無理に分類された症例の場合、あてがわれた診断名を頼りに治療を行うことは困難であることは言うまでもない。そしてそれは、精神障害を分類することで最終的には治療に役立てるというガイドラインの意義に反する形となってしまう。

そうした文脈の中で著者は、「ICD や DSM 診断に対して、各国の学会は、その文化や臨床の特異性に応じた修正補完版 (CM ; Clinical Modification) を付加している。それと同じように、司法精神医学、犯罪精神医学、矯正医学の領域では、例えば司法版 CM というべきものを準備する必要があるのではないか」と提案している。すなわち、殺人者は従来の診断分類にはうまく当てはまらない人々も少なくないため、より適切な分類を新たに作成しよう、ということである。このように新しい疾患名をガイドラインに付記することによって、精神鑑定における診断が「殺人者精神病」という名の下に一致し、鑑定の信頼性が高まることはいうまでもなく、殺人者精神病という概念化によって対象を明確に絞り込み、研究を重ねることでより適切な治療と結びつく可能性が高いと著者は主張しているのである。

しかし、著者がいうところの殺人者精神病とは、その概念は必ずしも疾病単位としての明確な

輪郭を持たず、様々な病像・人格像・経過を包括している。例えば、殺人者精神病の病因として、微細な脳障害、幼少期の被虐待・愛情剥奪体験、心的外傷などを挙げており、症状も人格障害や解離性障害、統合失調症など多彩なスペクトルを展開するとしている。また、統合失調症等の既存の精神疾患を疑わせる徴候を示す人々はもちろんのこと、仮に臨床的には精神障害を有するようには見えない場合においても、心理検査を施行すると精神障害に近い病理を露呈した場合は殺人者精神病として分類されるため、殺人者精神病は非典型的・非定型的であり、殺人者精神病は特異な疾病単位であると著者は述べているのである。ここで一つの疑問が生じる。「非典型的・非定型的であり、特異な疾病単位」であるということ、すなわち、その概念が明確な輪郭をも持たないままに成立するということは、DSMにおける「特定不能」の枠同様、その名前を知ることによって「支配する」ということは困難であり、それゆえに、殺人者精神病を一つの疾病単位として扱うことのメリットそのものが損なわれる可能性をも生み出すのではないだろうか。

とはいえ、殺人者精神病の人々は、症状や経過、人格などの面で多くのパターンが存在しえるが、殺人という経験を共通点としていることは明確であるため、一つの疾病単位と見立てて研究を重ねることが有効な治療手段の発見への糸口となる可能性は充分にあると考えられる。

さらに、殺人とは重大な触法行為であることは言うに及ばず、殺人者は他殺衝動の強さはもちろんのこと、その他殺衝動が内向した自殺衝動も強く、また、その抑制能力が乏しいことは良く知られている。そして、殺人行為は被害者にとっては他者の手により強制的にその生に終止符を打たれることであり、加害者にとっては深刻なトラウマと厳しい社会的制裁を招き、その後の生に暗い陰が落とされることを意味する。こうした双方の人生における重大な悲劇を避けるために、他者を殺めることも自分自身の命を自ら絶つことも共に予防する方法を模索することは、触法精神障害者の処遇に対する関心が急激に高まっている今日のわが国において急務であろう。

そうした中で本書は、従来では人格障害や統合失調症などの既存の精神障害の患者として診断・治療を受けるしかなかった者や、「治療の必要はない」とみなされた者たちに、「殺人者精神病の患者」としてより適切な診断と治療を受ける機会を提供するという、意義のある試みを紹介する一冊である。

国際シンポジウム「死とその向こう側」報告

多田 一臣（本研究科教授・国文学）

人文社会系研究科・文学部の21世紀COEプログラム「死生学の構築」が主催する国際研究会議「死とその向こう側」が、2月18日（土）、19日（日）の両日、文学部一番大教室において開催された。この研究会議は、フランスの二つの研究機関、すなわちフランス極東学院とトゥルーズ人類学研究所と共同で開催されたもので、フランスからはそれぞれの機関の代表者を含め計九名の研究者が参加した。司会まで含めると、登壇者が二十名にも及ぶ、きわめて大規模な会議であった。全体は、基調講演を中心とする公開シンポジウムを軸に、「進んで死を迎える」「非業の死を受け止める」「死者とともに生きる」と題する三つのワークショップから



構成され、最後に「総合討論」が置かれた。大盛況の中、有意義な発表及び討論を重ねることができた。

発表内容は、地域的には日本・中国・インド・南米・ヨーロッパ、時間的には太古から現代にまで及び、多様な議論が展開された。広い意味での生者と死者との交流のありかたを考えることが、今回の会議の中心であった。

基調講演は、フランシスキュス・ヴェレレン氏（フランス極東学院院長）が、中国道教の思想の中で、死者がどのような存在と見られていたかについて論じ、そこから祖霊の崇りをいかに鎮めるか、という問題を提起した。またジャン＝ピエール・アルベール氏（トゥルーズ人類学研究所所長）が、自発死の問題を取り上げた。殉教的な死（あるいは英雄的な死）をどう見るか、それは自殺とどう違うのか、という問題を提起した。

以下、「進んで死を迎える」では、よりよい死を迎える方法が、「非業の死を受け止める」では、非業の死者が生者に幸いをもたらす存在へと移行するプロセスが、「死者とともに生きる」では、死者の存在を身近に感じる多様な文化のありかたが、それぞれ議論された。

今後とも日本とフランスの間で、このテーマをさらに深めていくことを確認して、成功裏に終了した。

最後に、今回の会議に際し、フランス側の取りまとめ役であったアンヌ・ブッシー氏に感謝の意を申し上げたい。



「次世代死生学研究会議——深化と展開」報告

仁平 典宏（本COE特任研究員・社会学）

去る11月3日から5日まで、和歌山県の白浜・熊野にて「次世代死生学研究会議」が開催された。参加者は、本COEの研究員・RA・若手支援費研究員28名、及び京都大学のカール・ベッカー教授のゼミに参加している院生7名、教官やかつて本COEに在籍していた若手研究者などの11名で、総勢46名である。

3日間の日程で、研究部会、全体会、熊野霊地見学が行われた。

研究部会では、35名の報告者が、「死生の文化／表象」「いのちを考える」「宗教とスピリチュアリティ」「いのち・関係性・ケア」「日本における生命観の諸相」「死生と教育」「記憶と死生」「哲学の視線をめぐって」の8部会に分かれて、発表した。内容は多岐に渡るが、臓器移植の現状やそれが投げかける生命倫理上の課題、諸外国や過去の日本における多様な死生観の考察、医療現場や教育現場においていのちや死にどう向き合っていくかなど、アクチュアルな問題について活発な議論が行われた。ディシプリンを共有する通常の学会とは異なり、異なる学問領域を背景とした参加者同士の議論であるため、専門用語に頼らずより開かれた言葉を用いながら、共通の論点をめぐって白熱した討議が展開された。

全体会では、まず京都大学のベッカー教授が、「次世代のための死生学教育」について報告された。ベッカー教授は、現在の日本では、日本にかつてあった死生観の喪失、医療費の削減、臓器移植や延命治療を巡って判断を強いられる機会の増大といった社会的背景により、死生学教育が必要になっていると指摘される。その上で、急務の課題として、人権・自己決定・自己責任、支

援やカウンセリング提供、コスト削減時代の社会福祉改善という3つのレベルについて体系的に説明され、その内容として、初等教育、中等教育、高等教育、生涯教育、専門職に対する教育という5つの段階ごとに極めて具体的な提言が行われた。非常に内容豊かで、個々の参加者に実践的な課題を問いかける報告であった。続いて本COEの前川健一氏が、「日本の死生観」の一つの事例として「熊野における死生観の展開」を報告された。報告では、一遍と熊野の出会いの背景について実証的に解明され、それがもつ宗教史的な意義について精緻な考察がなされた。

その後、飯田篤司氏（鎌倉女子大学）と古澤有峰氏（本COEリサーチアシスタント）がコメントに立った。両者からは、社会から死生学に求められる実践性に対して、個々の死生学的研究——特に、歴史研究や哲学・思想研究をはじめとする実践との関係を問われやすい研究——は、どの水準で、どのように向き合っていくべきなのかといった点について先鋭な問題提起が行われた。これをめぐって、社会の要求に応えるとはどういうことなのかといった、突っ込んだ議論が行われた。

最終日には、牛馬童子や本宮大社などの見学が行われ、熊野という霊地で育まれてきた死生観の一端を学習して、全日程を終えた。

本会議の成果として、以下にあるように『次世代死生学論集』が刊行された（『死生学研究』2006年春号にも本会議の報告と議論をもとにした論文が多く掲載されている）。これらの論文や刊行物が重要な成果物であることは言うまでもないが、3日間の濃密な議論と対話を通じて若手研究員・院生の間に構築された学際的なネットワークこそが、目には見えないが最大の成果であったと考えられる。この会議が、将来の死生学の発展の上で大きな財産になっていくことが期待される。

『次世代死生学論集』 発刊

この「次世代死生学研究会議」の成果をまとめた『次世代死生学論集』が発刊された。これは、本研究会議の研究報告と議論をもとに、各報告者が深化させたテーマを論文としてまとめたものである。特に第2部は、8つの分科会報告をもとにし、多様な内容の32本の論文からなるが、既存の死生学の枠を超えて新しい問題の所在を指し示すような、「次世代」の名に恥じない意欲的な論文がそろっている。多くの方の参看を期したい。

（目次）

第1部：日本社会と死生学の意義（2005年11月4日 シンポジウムの記録）

司会：下田正弘（本COE事業推進担当者）

提題：カール・ベッカー（京都大学教授）「次世代のための死生観教育：理由、段階、内容」

前川健一（本COE特任研究員） 「一遍と熊野——熊野託宣の再検討」

コメント：飯田篤司（鎌倉女子大学助教授）

古澤有峰（本COEリサーチアシスタント）

第2部：死生学の展開（計8章／32論文）

「死生の文化／表象」「いのちを考える」「宗教とスピリチュアリティ」

「いのち・関係性・ケア」「日本における生命観の諸相」「生／死と現代社会」

「記憶と死生」「哲学の視線をめぐって」

第3部 熊野と死生学

麻生享志（本COE特任研究員）「熊野信仰論」

義江彰夫（本学総合文化研究科教授）〔特別寄稿〕「平安時代の人々の神仏への心」

「共生のための国際哲学交流センター」(UTCP)との協力

末木 文美士(本研究科教授・仏教学)

「共生のための国際哲学交流センター」(University of Tokyo Center for Philosophy: UTCP)は、駒場の総合文化研究科を中心とした21世紀COEプログラムであり、小林康夫教授が拠点リーダーを務め、石黒ひでロンドン大学名誉教授がチェアパーソンとして、国際的な哲学センターの確立を目指している。センターは以下の五部門に分かれて活動している。

- (1) 自然との和解(部門リーダー・村田純一教授)
- (2) 新しい認知パラダイム(部門リーダー・門脇俊介教授)
- (3) 共通感覚(部門リーダー・小林康夫教授)
- (4) 対話の論理(部門リーダー・高橋哲哉教授)
- (5) 文化と宗教における共生(部門リーダー・宮本久雄教授)

これまで、西洋哲学関係を中心として、海外から数多くの著名な研究者を招聘して研究会やシンポジウムを行なうなど、活発な活動を展開してきたが、それに対して日本や東洋の伝統に根ざした哲学の発信という面がやや弱かった。そこで、その面を充実させるために、第三部門に仏教を中心としたプロジェクトを組み込み、その事業推進担当者として2005年度から私に加わるようになった。

具体的に、2005年度に私が担当して行なった事業は、「現代仏教セミナー」の開催であった。これは、小林康夫教授と私が企画と総合司会に当たり、全5回で、本郷の仏教学関係の教員をゲストに招いて討論するというものであった。

第1回(10月24日)「いま 仏教を問う」(末木文美士×小林康夫)

第2回(11月28日)「近代仏教学の展開とアジア世界」(ゲスト・下田正弘、コメント・島菌進)

第3回(12月12日)「仏教から他者を問う」(ゲスト・丘山新、コメント・小島毅)

第4回(1月30日)特別講演「仏教の時間論」(山口瑞鳳名誉教授、コメント・植村恒一郎、司会・野矢茂樹)

第5回(2月20日)「〈空〉とは何か」(ゲスト・斎藤明、コメント・丸井浩)

その様子は、『読売新聞』2005年11月28日夕刊文化面に掲載されるなど、広く注目を浴び、毎回約50名の聴衆が集まり、18時から約2時間、活発な討議が交わされた。

人文社会系研究科から私に加わった当初から、これまで必ずしも十分でなかった人文社会系研究科と総合文化研究科の交流を盛にしようということが一つの狙いであり、特に死生学との連携を強めることを課題としてきた。「現代仏教セミナー」にも、死生学から島菌進拠点リーダーや下田正弘助教授が参加して、その緒を作ってくれた。2006年度には共催のシンポジウムや研究会を行ない、より具体的な協力を行なっていこうと準備中である。現在計画しているプランには以下のようなものがある。

- (1) 新入生歓迎シンポジウム「生死を超えて ― ふたたび仏教を問う」

日時：4月24日(月)18:00-19:30 会場：駒場学際交流ホール

発表者：末木文美士、小林康夫 ディスカッション：中島隆博、竹内整一

司会：門脇俊介

「現代仏教セミナー」の総まとめを兼ねて、生死という観点から仏教を見直す。

- (2) フォール教授(コロンビア大学、仏教研究)のワークショップ(5-6月)

- (3) バトニツキー準教授(プリンストン大学、レヴィナス研究)のワークショップ(7月)

ふたつのCOEを結んで、充実した成果が得られるように、皆様のご協力をお願いしたい。



今後の行事予定

Nick Zangwill 博士（オックスフォード大学）連続講演会

2006年5月中旬にOxford大学などで活躍するNick Zangwill博士の連続講演研究会を開催いたします。講演主題は、

- 1 On moral motivation: against Kantian Views**
- 2 On genocidal motivation**

を予定しています。前者はカント倫理学批判の試みであり、後者は大量虐殺についての倫理的問題を扱います。日程など詳細は決まり次第HPに掲載いたしますので、そちらをご参照ください。（担当・一ノ瀬正樹）

Peter Singer 氏講演研究会

6月開催予定（詳細はHPをご覧ください）

公開シンポジウム「死生学と宗教文化」（仮）

7月下旬予定（詳細はHPをご覧ください）

・駒場美術博物館特別展『聖書に生きる：聖書の成立からユダヤ教へ』（仮）の関連企画です。

本プログラム機関誌『死生学研究』2006年春号 発刊!

似田貝香門	支援の実践知：〈ひとりの人として〉をめざす支援の実践知
高山 守	生命とは何か：因果関係を問い返しつつ
堀江 宗正	心理学的死生観の問題構成：フロイト・ユング・フランクルの思想から
朝倉 友海	生物学的人間像と精神の永遠性：スピノザ哲学における死生
嶋内 博愛	民間伝承における救済の諸表現：「燃える人」と世界のトポロジー
比留間亮平	ルネサンスにおけるスピリトゥス概念と生命論
新島 典子	飼主の死生観と亡きペットの存在感：「家族同様」の対象を亡くすとは

<シンポジウム「儒教における生と死」報告>

小島 毅	解題
杜 維明	創造力をめぐる「人間-宇宙」的観点
杜 維明	儒教における死へのまなざし
小島 毅	死を見据える：儒教と武士道、「行の哲学」の系譜
岸 貴介	なぜクローン人間は許されないのか?：反対根拠の更なる検討と暫定的結論
瀬尾 文子	18 世紀の受難理解と死生観：G. Ph. テレマン《イエス・キリストの受難と死についての至福な省察》(1722)における省察の意義
杉木 恒彦	ヒンドゥー教徒たちの魂の送りと性的マイノリティーたちの文化運動
高橋 尚子	日本におけるテーラワダ仏教実践者の回心プロセスと死生観
林 貴啓	「問いのスピリチュアリティ」からの教育
山本佳代子	SOCを向上させる世界観の教育の可能性：現在、そして将来にわたる自殺予防、犯罪予防のために
有田 恵ほか	死による自己存在の問題：中年期後期の末期癌患者のインタビューから
松本 聡子	覚せい剤乱用青年における死生と処遇に関する研究
青柳 路子	E. キューブラー=ロスの思想とその批判：シャバンによる批判を手がかりに (下)
伊野 真一	家族の個人化と死生観

モンゴベン	体と血を共有すること：臓器提供、犠牲、フェミニスト批判
サヴァレスキュ	人間の増進的介入における倫理

欧文レジюме

『死生学研究(英語版)』 *Bulletin of DALs* 第2号 発行!

Philosophy of Uncertainty and Medical Decisions

(Bulletin of Death and Life Studies Vol.2)

Bulletin of Death and Life Studies は『死生学研究』の外国語版で、本号は第2号です。本号は、昨年度開催された国際シンポジウム「生死をめぐる同意と決定」の英語報告書(プロシーディングズ)となっています。

(目次)

Introduction, *Masaki Ichinose*

PART ONE: THE PHILOSOPHY OF FACING UNCERTAINTY: EPISTEMIC LIMITS, PROBABILITY, AND DECISION

Bayesianism, Medical Decisions, and Responsibility, *Masaki Ichinose*

Is a Decision-Theorist a Friend or Foe of a Bayesian-Theorist? Comments on Professor Ichinose's Paper, *Daisuke Kachi*

Confirmation in Economics (Comments on Professor Ichinose's Paper), *Colin McKenzie*

The Limits of Knowledge, *Graham Priest*

Comments on "The Limits of Knowledge", *Takashi Iida*

The Logic of Probable Inference, *Colin Howson*

Comment: The Logic of Probable Inference, *Kazuo Shigemasa*

Subjective and Objective Probabilities in Medical Decision Making, *Donald Gillies*

Some Questions for Professor Gillies, *Nobuharu Tanji*

Probability and the Notion of Luminosity, *Timothy Williamson*

PART TWO: CHOICES ABOUT LIFE AND DEATH

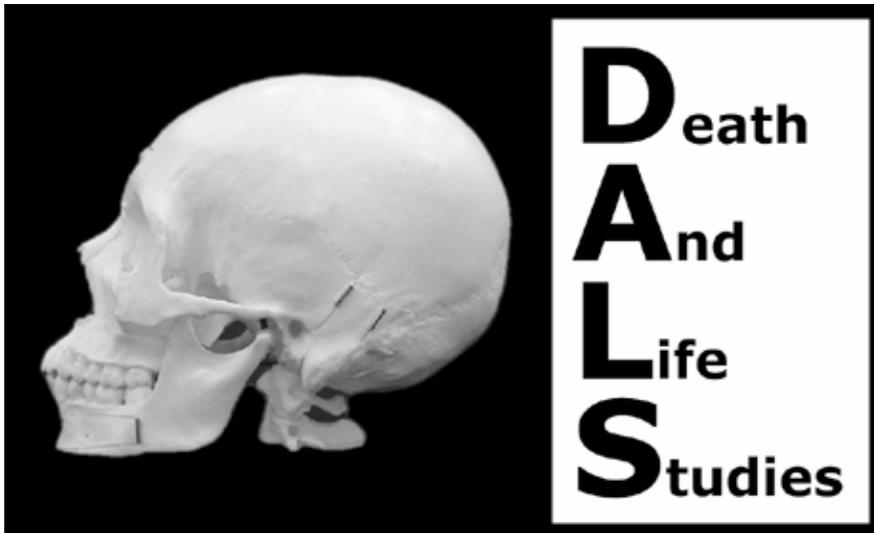
Decision Making in Medicine, *Isao Kamae*

The Decision-Making Process in Medicine: Treatment Choices That Affect Life and Death, *Tetsuro Shimizu*

The Choice between Life and Death: Reports of Actual Medical Lawsuits, *Toshihiro Suzuki*

From the Health-Care Economics Point of View: Information, Philosophy, and Decision-Making, *Takashi Asao*

PART THREE: SYMPOSIUM ON CONSENT AND DECISION CONCERNING LIFE AND DEATH



「DAL S ニュースレター」

第 1 3 号

平成 1 8 年 4 月 1 0 日発行

東京大学大学院人文社会系研究科

2 1 世紀 COE “生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築”

責任者 島 菌 進

TEL & FAX 03-5841-3736